

of と out of が表す部分・全体の関係

田中 秀毅

[要約]

本研究は、A of B 形式（部分構造）と A out of B 形式の統語的・意味的特性について考察する。Tanaka (2012)と田中(2015)は、どちらの形式もグループ・メンバーの関係を表しうることを観察している(e.g. two {of/ out of} the five books)。ただし、決定的な違いとして、部分構造はタイプ・トークンの関係を表しうるが、A out of B 形式はそれを表さないということがある(two copies {of/ *out of} the book)。本研究の目的は、この対照性の由来を解明することである。まず、A out of B 形式の本質の意味が A と B の要素が表す数量の対比であることを指摘し、その特徴により非有界的な集合を表すタイプ名詞が排除されると主張する。また、of と out of の意味的な違いにも注目する。Lindstromberg (2008)に基づき、out of の動的なイメージ（境界線を突き抜ける・またぐこと）がその目的語に対して数量的な明示性を要求すると主張する。

1. はじめに

「部分・全体の関係」(part-whole relation)を表す句表現として、英語にはつぎのような A of B と A out of B の 2 つの形式がある(説明の便宜上、A 位置の要素を「第 1 名詞(句)」、B 位置の要素を「第 2 名詞(句)」とよぶことにする¹⁾。

- (1) a. two of the five books [A of B]
 b. two out of the five books [A out of B]

A of B 形式は「部分構造」(partitive construction)とよばれている。部分構造では、第 1 名詞(句)と第 2 名詞(句)が部分・全体の関係を結ぶ。(1a)では、the five books が母集合を表し、two がその部分集合を表す。A out of B 形式は形式的にも、意味的にも部分構造に似ている。(1b)では、第 2 名詞句の the five books が母集合を表し、第 1 名詞の two がその部分集合を表す。

部分構造と A out of B 形式の意味的な類似性は、つぎの文で部分構造が A out of B で補足されていることから裏づけられる。

- (2) Most of the housewives—twenty-four out of the forty—said that their husbands only commented negatively, never appreciatively. (BNC)

ここでは、主節主語の部分構造は「主婦の多く」を意味し、主婦の集合に対する割合を表している。一方、部分構造に続く A out of B 形式は「(主婦) 40 人中 24 人」を意味し、部分構造の意味を具体的な人数の比を示すことで補足している。

部分構造と A out of B 形式には重要な違いもみられる。たとえば、第 2 名詞句として不定名詞句を許すかどうかについて、2 つの形式は対照的に振る舞う。

- (3) a. some of *(these) girls, all of *(his) daughters
 b. two out of five books cf. (1b)

(3a)はいずれも部分構造であるが、第 2 名詞句の決定詞(determiner)を省くと容認されない(句や文に出典が示されていない場合、その容認性判断は筆者のインフォーマントによるものである)。これと対照的に、(3b)は第 2 名詞句が不定名詞句であるが、容認される(ただし、解釈として(1b)と同義のものに加えて、「5 冊に対して 2 冊」という比率解釈もある)。

本研究は、部分構造と A out of B 形式の共通点と相違点をまとめ、とくに相違点の由来について考察する。構成は以下のとおりである。第 2 節では、部分構造と A out of B 形式の基本的な特徴について概説する。第 3 節では部分構造と A out of B 形式によって表される部分・全体の関係を比較し、相違点の由来について論じる。第 4 節では of と out of の意味機能の違いと、表しうる部分・全体の関係の種類に対応関係について考察する。第 5 節では結論を述べる。

2. 部分構造の基本特性

部分構造は比較的早くから研究されており、70 年代後半には Selkirk (1977) や Jackendoff (1977) など本格的な理論研究がなされている。一方の A out of B 形式は、部分構造ほど詳細に研究されていない。本節では、2 つの形式を比較する準備として、先行研究で解明された部分構造の基本特性を押さえることにする。

Jackendoff (1977) は部分構造を「擬似部分構造」(pseudopartitive) と「真部分構造」(true partitive) の 2 つに分類している (Selkirk (1977) も参照)。真部分構造では第 1 名詞 (句) と第 2 名詞 (句) の間に部分・全体の関係が成立するが、擬似部分構造ではそのような関係が成立せず、句全体で 1 つの集合が表される。このことを以下の例で確認してみよう。

(4) 擬似部分構造

a bunch of men, a group of women

(5) 真部分構造

a bunch of the men, a group of the women

どちらの種類の部分構造も第 1 名詞句として、group のような個体のまとまりを表す名詞が生じている。第 2 名詞 (句) との意味関係に目を向けると、(5) の例では第 2 名詞句が母集合を表し、第 1 名詞句がその部分集合を表している。結果として、句全体で部分・全体の関係を表す。これと対照的に、(4) の例では第 1 名詞句は第 2 名詞の指示物のまとまりを表すだけで、部分集合を表さない。よって、(4) の例は句全体で 1 つの集合を表すことになる。

擬似部分構造と真部分構造の統語的な違いとして、第 2 名詞 (句) が決定詞を含んでいるかどうかがある。すなわち、擬似部分構造では第 2 名詞がはだか名詞 (bare noun) になるのに対して、真部分構造では第 2 名詞句は定冠詞や属格指定辞のような決定詞を含む。この違いから第 2 名詞 (句) が母集合を表すかどうかの違いが生じる。

なお、(4)と(5)では擬似部分構造と真部分構造が同一の第1名詞句をとっているが、同一の第1名詞(句)から常に2種類の部分構造を作れるわけではない。つぎのように *one* や *most* のような数量詞(quantifier)が第1名詞として生じた場合には、擬似部分構造は許されず、真部分構造になる。

- (6) a. **one of boys*, **most of students* (cf. *most students*)
 b. *one of the boys*, *most of the students*

この文法対立は、第2名詞句が決定詞(ここでは定冠詞)を含まなければならないことを示している。この制約は「部分構造制約」(partitive constraint)とよばれている。以下は、Jackendoff (1977)による同制約の記述である。

(7) Partitive Constraint

In an *of*-N^o construction interpreted as a partitive, the N^o must have a demonstrative or genitive specifier. (Jackendoff (1977: 113))

この定義は X^o 理論に基づいているため、N^o という階層を表す記号が用いられているが、これは決定詞を含んでいる完全な名詞句(full NP)と読み換えられる。ようするに、*of* 句が部分構造(の一部)とみなされるには第2名詞句が指示詞または属格指定辞を含んでいなければならない、ということである。

(3)と(4)をふまえると、部分構造制約は真部分構造に課されるが、擬似部分構造や A out of B 形式には課されないことがわかる。A out of B 形式については次節で詳しく考察するので、ここでは真部分構造との違いを指摘しておくだけにする。

これまでみてきた部分・全体の関係は、グループ・メンバーの関係であったが、部分・全体の関係には別の種類もある。田中(2015)は、部分構造によって表される部分・全体の関係をつぎのように3つに分類している。

(8) ①グループ・メンバーの関係：M 部分関係

e.g. *two of the five books*, *most of the apples*

②単一の個体とその一部分の関係：I 部分関係

e.g. *two pages of the book*, *a branch of a tree*

③タイプ・トークンの関係：T 部分関係

e.g. *two copies of the book*, *two of those apples* (‘そのりんご2つ’)

①はグループ・メンバーの関係（M 部分関係の M は member の頭字）である。つまり、第 2 名詞（句）が個体の集合を表し、第 1 名詞（句）がその部分集合を指している。

②は単一の個体とその一部分の関係（I 部分関係の I は inalienable part の頭字）である。I 部分関係は、book に対して page, tree に対して branch のように単一の個体とその譲渡不可能な部分との関係を表す。第 1 名詞句が数量詞だけでなく、第 2 名詞句の指示物の部分名称（page や branch など）を含む点で M 部分関係とは明確に異なる。

③はタイプ・トークンの関係（T 部分関係の T は token の頭字）である。T 部分関係は、本を例にとると、本のタイトルと実際に手にとることのできる本の関係になる。本のタイトルはそれ自体で冊数を表さないため、M 部分関係とは異なるが、第 1 名詞句は具体的な本の冊数を指している。T 部分関係で得られるタイプ解釈は、kind/ sort/ type などの類別詞でも表される（たとえば、What kind of pen do you like?における pen の解釈）が、本の場合には copy というトークンを表す形式が存在し、後続する名詞句がタイプ解釈（つまり、タイトルの解釈）を受ける。田中(2015)は T 部分関係を表す別の形式として、第 2 名詞句が these/ those などの指示詞を含む部分構造(e.g. two of those (apples))や第 2 名詞が代名詞 them の部分構造(e.g. two of them)も認めている。

本節では、部分構造の基本的な性質を概観した。部分構造が第 2 名詞句の定性によって擬似部分構造と真部分構造に分類されることや、真部分構造が表す部分・全体の関係には、M 部分関係・I 部分関係・T 部分関係があることをみた。なお、以下では表記を簡略化するために、断りのない限り「部分構造」によって真部分構造を指すことにする。

3. 部分構造と A out of B 形式の比較

本節では部分構造と A out of B 形式を比較する。まず、3.1 節で田中(2015)の主張をまとめ、3.2 節で部分構造と A out of B 形式が表しうる部分・全体の関係の種類の違いについて論じる。

3.1 田中(2015)の考察

田中(2015)は、Tanaka (2012)の観察をふまえて、部分構造と A out of B 形式で表しうる部分・全体の関係の範囲が異なると述べている。具体的には、部分構造が M・I・T の部分関係を表すのに対して、A out of B 形式は M 部分関係または比率を表す

と主張している。

比率とは第 1 名詞 (句) と第 2 名詞 (句) がそれぞれ表す数の比のことで、第 2 名詞 (句) が〈全体〉であるかどうかは問題にならない。たとえば、つぎの例では A out of B 形式が比率を表している。

(9) Nearly two out of five video owners find it difficult to programme their machines for recording because it is too complicated. (BNC)

(10) Out of every five children born in rural Indonesia, one child will never live past his or her fifth birthday. (WB)

(9)の A out of B 形式は、第 1 名詞句として *nearly two* が生じている。ここでは人数を問題にしているため、「およそ 2 人」とは実際の人数ではなく比率の解釈でなければならない。つまり、「ビデオデッキの所有者の 5 人につきおよそ 2 人」という意味で、実際はたとえば 100 人中およそ 40 人のような状況である。(10)では out of B が A から切り離されて文頭に生じている。² 第 2 名詞句は *every five children* であるが、「子ども 5 人につき」という、比率の意味になる。

A out of B 形式は、第 2 名詞句が定名詞になると比率でなく、M 部分関係を表すようになる。(9)の A out of B 形式の第 2 名詞句を定名詞句で置き換えると、つぎのように容認されない。

(11) *Nearly two of the five video owners find it difficult to

これは、第 2 名詞句が母集合を表すようになった結果、第 1 名詞句の *nearly two* が実際の人数 (つまり、1 人より多く、2 人より少ない人数) を指すことになり、意味をなさないためである。

つぎに A out of B 形式が T 部分関係を表さないことをみる。まず、部分構造の、関連する特徴を押さえておこう。部分構造は、M 部分関係を表す場合 (以下、「M 部分構造」とよぶ)、*there* 存在文の意味上の主語になることができない。

(12) *There are most of the cookies on a plate.

この逸脱性は、当該部分構造で (第 2 名詞句によって表される) 母集合の存在が前提とされることによる。より一般的には、母集合の存在を前提とする *all*, *most* のよう

な「比率的数量詞」(proportional quantifier)と母集合の存在を前提としない some, many のような「基数的数量詞」(cardinal quantifier)の性質の違いに還元できる。³ すなわち、Milsark (1974)が指摘しているように、there 存在文の意味上の主語になることができるのは、比率的数量詞ではなく、基数的数量詞のほうである。

- (13) a. There are some cookies on a plate.
 b. *There are most cookies on a plate.

ところが、部分構造の種類によっては there 存在文と整合するものがある。それは、T 部分関係を表す部分構造（以下、「T 部分構造」とよぶ）である。つぎの対話の実例でそれを確認してみよう。

- (14) T: Are there many of those machines? Because the autistic boy had one.
 A: I think around 20,000 were made. And there are probably about 1,500 that are still in existence.

(*Bones* における Temperance と Angela の対話)

テンペランス(T)の発話の第 1 文は there 存在文の疑問文であるが、意味上の主語として部分構造が生じている。アンジェラ(A)の発話で those machines（ここでは「あの(型の)ゲーム機」の意味)の数が約 2 万台と伝えていることから、テンペランスは母集合を前提にしていない(つまり、M 部分関係を意図していない)ことがわかる。むしろ、テンペランスがたずねているのは、自閉症の少年がもっていたゲーム機(と同じ型のもの)がたくさん出回っているのかということである(アンジェラの第 2 文がその回答に相当する)。したがって、many of those machines は M 部分構造ではなく、T 部分構造だということになる。このように T 部分構造が there 存在文の意味上の主語として許容される理由は、つぎのように説明される。タイプ名詞が表す集合は、非有界的(unbounded)であるため、母集合のメンバーの数が定まらない。これは、母集合の前提が成立しないことと同じであるため、T 部分構造は there 存在文と整合する。

ここまで、there 存在文の意味上の主語として容認される部分構造が(M 部分構造ではなく、) T 部分構造であることをみた。以下では、A out of B 形式と部分構造を比較していく。まず、つぎの対話の例をみよう。話者 A は話者 B に対して所有するモンブラン・ペンの本数を聞いているが、B₁ の応答は部分構造を含み、B₂ の応答は A out of B 形式を含んでいる。

(15) A: How many Mont Blanc pens do you have?

B₁: I have two of them.

B₂: *I have two out of them.

(Tanaka (2012: 168))

Aの質問は、モンブラン・ペンの母集合を前提にしているのではなく、単にモンブラン社製(タイプ)のペンを何本所有しているかを聞いている。B₁の部分構造は文脈によってはM部分関係を表しうるが、ここではT部分関係の解釈が選択される。これに対して、B₂のA out of B形式にはM部分関係の解釈しかない。したがって、Aの質問に対する適切な答えはB₂ではなく、B₁になる。

一方、つぎの対話の例では、話者Aは話者Bに対して読書リストに含まれている本のうちの何冊を読んだのか聞いている。B₁の応答は部分構造を含み、B₂の応答はA out of B形式を含んでいる。

(16) A: How many books on the reading list have you read?

B₁: I have read two of them.

B₂: I have read two out of them.

(Tanaka (2012: 168))

Aの質問は、読書リストの本の集合を前提にして、そのうちの何冊読んだのか聞いている。ここでは、B₁の答え方でもB₂の答え方でも許容される。というのも、この文脈ではM部分関係が問題になっているが、当該関係は部分構造でも、A out of B形式でも表されるからである。なお、B₁の部分構造は(15)のB₁の部分構造と異なり、M部分関係の解釈を受けていることに注意しなければならない。

(15)と(16)の言語データから読み取れることは、two of themが意味的に曖昧で、M部分構造の解釈とT部分構造の解釈をもつが、two out of themにそのような曖昧性がなく、M部分構造の解釈しかもたないということである。部分構造に生じるthemに2つの解釈の可能性があることが重要である。すなわち、themが指示的であるとき((16)の場合)には、前提とされる母集合を指し、M部分関係の解釈が導かれる。一方、themが非指示的な場合、つまりタイプ解釈を受けるとき((15)の場合)には、漠然とタイプを表し、T部分関係の解釈が導かれる。このようなタイプ解釈を受けられる名詞句として、田中(2015)はつぎのように指示詞を含む場合もあげている。

- (17) a. The student bought three of those pens at a stationary store.
b. The student bought three out of those pens at a stationary store.

(Tanaka (2012: 168))

(17a)の部分構造は M 部分関係の解釈（あらかじめペンの母集合が導入されている場合）と T 部分関係の解釈（ペンの種類が特定されている場合）で曖昧になる。一方、(17b)の A out of B 形式は M 部分関係の解釈しかもたない。⁴

以上、田中(2015)の考察を要約した。部分構造が M 部分関係の解釈と T 部分関係の解釈で曖昧になりうるのに対して、A out of B 形式は T 部分関係の解釈をもたず、M 部分関係もしくは比率を表すことをみた。

3.2 部分構造と A out of B 形式の意味特性の由来

本節では、部分構造が M 部分関係と T 部分関係の両方を表しうるのに対して、A out of B 形式は M 部分関係しか表せない理由について考える。

M 部分構造（M 部分関係を表す部分構造）と A out of B 形式の共通点は、第 2 名詞句が表す母集合の有界性(boundedness)である。部分構造の場合、部分構造制約によって第 2 名詞句として定(definite)の名詞句が要求されるが、それによって第 2 名詞句の有界性が担保される。

- (18) a. Only a few of the ten reviewers praised his play.
b. ?*Only a few of ten reviewers praised his play.

(Quirk et al. (1985: 1287))

(18a)の部分構造は、第 2 名詞句が定名詞句になっており、適切に M 部分関係を表している。一方、(18b)の部分構造は、第 2 名詞句が有界的であるけれども、部分構造制約を満たさないため容認されない。M 部分構造では第 2 名詞句に対して有界性よりも厳しい制約が課されるのである。

これに対して、A out of B 形式では第 2 名詞句として定名詞句に加えて、不定(indefinite)の名詞句も容認される。ただし、後者の場合は数量が明示されていなければならない。

- (19) a. Ten out of the fourteen women were single.
b. Ten out of fourteen women were single. (Quirk et al. (1985: 1287))

c. ?*Ten out of women were single. (ibid.)

(19a)の A out of B 形式は、定の第 2 名詞句(the fourteen women)をとっており、部分構造と同様に M 部分関係を表している。(19b)の A out of B 形式は、第 2 名詞句(fourteen women)が不定であるが、部分構造と対照的に容認される。解釈は、M 部分関係の解釈(14 人の女性からなる集合のメンバーの 10 人)もしくは比率の解釈(14 人につき 10 人の女性)になる。(18c)では第 2 名詞(women)が非有界的な不定名詞になっており、容認されない。非有界的な 2 名詞は、第 1 名詞に対する母集合としても機能できないし、第 1 名詞と比率関係を結ぶこともできない。

これまでの考察から、本研究は M 部分構造と A out of B 形式の本質的な意味を、つぎのように定める。M 部分構造では、(M 部分関係が表されることから)第 2 名詞句が母集合(つまり、〈全体〉)を表すことが要求される。これに対して、A out of B 形式で表される意味関係は、第 1 名詞(句)が表す数と第 2 名詞(句)が表す数の対比である。⁵ A out of B 形式の第 2 名詞(句)が母集合を表す場合には、M 部分関係が得られる。つまり、A out of B 形式によって表される M 部分関係は、副次的に得られる意味ということになる。

A out of B 形式の本質的な意味が数の比であることは、つぎの文法対立からも裏づけられる。

- (20) a. {all/most/half} of the students
 b. *{all/most/half} out of the students

(20a)は部分構造で、第 1 名詞として比率的数量詞が生じている。ここで表されている部分関係は M 部分関係で、第 1 名詞は母集合に対する割合を表している。一方、(20b)は A out of B 形式で、やはり第 1 名詞が比率的数量詞になっているが、容認されない。この文法対立からつぎのことがいえる。部分構造は母集合に対する割合を表すことができる。つまり、第 1 名詞が比率的数量詞で具体的な数を表さなくても、部分関係として認可される。対照的に、A out of B 形式では、第 1 名詞として比率的数量詞のような、それ自体が数(基数や概数)を表さない表現は認められない。A out of B 形式では B だけでなく、A もまた自立的に数量を表す必要がある。これは、換言すれば、A out of B 形式で A と B の数の比が問題になっていることにほかならない(比率はむしろ句全体から導かれるものである)。

A out of B 形式の本質的な意味が数の対比であるという、本研究の見立てが正しけ

れば、当該形式が T 部分関係を表しえない事実が自然に説明できる。このことを、つぎの文法対立に基づいて考えてみよう。

- (21) a. two copies of the book
b. *two copies out of the book

(21a)は T 部分構造で、第 1 名詞句の two copies がトークン（手にとることができる本）を指し、the book がタイプ（本のタイトル）を指している。タイプ解釈を受ける第 2 名詞句の指示対象の個数を問題にすることはできない。というのは、タイプは定義上、空間的・時間的な規定を受けないからである。この点をふまえると、(21b)の A out of B 形式が容認されない理由が説明できる。第 1 名詞句は 2 冊という具体的な数を表しているけれども、タイプ解釈を受ける第 2 名詞句は具体的な冊数を表さないため、第 1 名詞句と第 2 名詞句の数を対比できないのである。

以上、本節では部分構造と A out of B 形式の基本的な意味特性をまとめ、部分構造が M 部分関係と T 部分関係の両方を表せるのに対して、A out of B 形式が M 部分関係は表せるけれども T 部分関係は表せない理由について考察した。

4. of と out of の意味特性の比較

前節では、部分構造と A out of B 形式が表しうる部分・全体の関係の範囲が異なることを示した。すなわち、T 部分関係は部分構造でしか表されない。そして、この対照性が、A out of B 形式の本質的な意味が第 1 名詞（句）と第 2 名詞（句）の数の対比であることに起因すると主張した。本節では、数の対比と out of の関係を探るべく、of と out of の意味的な機能に注目する。

Lindstromberg (1998: 33)は、out of の of が古英語の名残で、その時代には of がしばしば from の意味で用いられたと述べている。さらに、以下の Bolinger (1971)の観察に基づいて、ランドマークが特定化(specify)されている場合に of を省略できないと主張している(Lindstromberg は、前置詞によって関係づけられる 2 つの個体のうち、固定されていないものを主体(Subject) (主語は小文字表記で区別される)、固定されているものをランドマーク(Landmark)とよんでいる)。

- (22) a. He walked {out / ?out of} the door.
[Door means 'doorway' and refers to the opening not the door itself.]
b. Termites crawled {out of / *out} the door.

[Here *door* does not mean ‘doorway’; i.e., the termites had been living in the wood of the door.]

(Lindstromberg (1998: 33))

(22a)では *the door* が玄関の意味で、ドアそのものでなく、空間的な広がり(*opening*)を表しているため *of* が不要であるが、(22b)では *the door* がシロアリのすみかになっていて、ドアそのものを指しているため *of* が必要となる。

ランドマークが特定化されている場合に *out of* が選択されるという分析をふまえると、*A out of B* 形式における第 2 名詞 (句) の数量的な明確性はつぎのように説明できる。すなわち、*out of* の目的語は、個体数の定まっていない、漠然とした集合ではなく、有界的な集合を表さなければならない。

では、部分構造の *of* がタイプ名詞のような、数量が漠然としている非有界的な集合を目的語としてとれるのはなぜだろうか。これについては、つぎの句における *of* と *off* の対照性が示唆的である。

(23) a. 15% off the price

[The Landmark is (metaphorically) removed from the Subject.]

b. 15% of the price

[The Landmark is a part of the Subject.]

(Lindstromberg (1998: 202))

Lindstromberg は、*off* が常に主体のランドマークからの分離(*separation*)を示すのに対して、*of* はそのような概念とは無関係であると主張している。(23a)では 15%が価格から取り除かれる (値引きされる) ことを示しているが、(23b)では 15%は価格の一部分を指すだけということである (たとえば、定価が 1000 円だとすると、(23a)は 15%引きの価格(つまり、850 円)の意味になるが、(23b)は定価の 15%を指すため 150 円の意味になる)。つまり、(23b)の部分構造は、第 1 名詞と第 2 名詞句が部分・全体の関係 (ここでは I 部分関係: 単一の個体とその中身の関係) にあることを示しているだけで、(23a)のように〈部分〉が〈全体〉から切り離されることはない。部分構造の *of* は、主体である〈部分〉とランドマークである〈全体〉を結びつける働きをしていて、*off* が表すような分離を含んでいない。

さらに、Lindstromberg は、*off* と *out of* がそれぞれ意味的に *from* に類似すると指摘している。まず、*off* と *from* の類似性はつぎの文で観察される。

- (24) A picture fell off the wall. (Lindstromberg (1998: 45))

ランドマークが the wall のような物を表す名詞の場合には、off が標準的である。この文で off を from で置き換えることは可能であるが、その場合には学術的(learned)な響きになるという。⁶

out of と from の類似性はつぎの文によって裏づけられる。

- (25) Vinegar is made {from/ out of} apple juice. (Lindstromberg (1998: 44))

ここでは、ランドマーク(apple juice)が主体(vinegar)の原料として表されている。Lindstromberg によれば、out of の意味には、「境界を突き抜ける・またぐ」(penetration or crossing of a boundary)といった「動的イメージ」(dynamic image)が含まれるが、from の意味にはそのような細かい概念は欠けているという。⁷さらに、(25)で out of を用いると具体的な動きが想起されるために、抽象度が高い from と比べて、口語的に聞こえると指摘している。

これまで out of と off がどちらも「動的な分離」(dynamic separation)の概念を共有することをみた。一方で、of にはそのような概念が含まれない。ここで、つぎのような例に含まれる「除去・はく奪の of」を分離とみなせるのではないかという疑問が生じるかもしれない。⁸

- (26) The duke deprived/robbed the peasants of/ *from all their livestock.
[peasants → livestock]
(Lindstromberg (1998: 205))

この構文では、ランドマーク（ここでは the peasants）が主体（ここでは all their livestock）よりも前に生じる。この場合の of について、Lindstromberg は「実際の移動が含意されないことがある」(use of of would not imply actual movement)と指摘している。たとえば、公爵が家畜の所有権を請求したあとでも小作人が引き続きその家畜を管理した、という状況でも(26)を用いることができる。また、(26)で from が許されない理由について、Lindstromberg は、現代英語の文法でランドマーク→主体という配列がおかしいためだとしている。つぎのように動詞を変えて主体→ランドマークの順にすれば、from/ off によって適切に分離を表すことができる。

(27) The duke took all their livestock from/ off the peasants.

(Lindstromberg (1998: 206))

歴史言語学では、of の原義は *away from* (...から離れて) であって、強形として *off* が、弱形として *of* が生じたとするのが通説である。⁹ この点については、つぎの記述が参考になる。

There are a great many expressions left over from centuries past when *of* expressed notions of 'separation' which are now usually expressed by *from*, *away (from)*, *out (of)* and *off*. (Lindstromberg (1998: 203))

現代英語の文法では、of がもともと表していた分離の概念はほかの前置詞で表される、ということである。¹⁰ この主張は、多義語である of の意味ネットワークからも裏づけられる。瀬戸(2007)は of の中心義を「〈全体〉に部分として属する」と捉えている。部分・全体の関係は、部分が全体に対して接点をもつ(依存する)ことから、由来の意義に広がり、それが場所からの出所に結びついて「離れて」という意義が派生する、と分析する。この派生順序をふまえると、of の原義からずれる形で意味ネットワークが構築されていることになる。なお、*a man of Osaka* のような「出所の of」について、瀬戸(2007: 650)は、「部分が全体に属する」という中心義を引き継ぐため、*He is from Osaka* よりも帰属意識が強く感じられる、と述べている。

以下では、of が動詞や形容詞などの述語成分と組み合わせられずに、分離を表しうるかどうかを検証する。結論からいうと、of には *from/ off* とは異なり、分離の意味を認めることはできない。つぎの句をみてみよう。

(28) a. snow {from/ off} the road

b. *snow {of/ out of} the road

(28a)の *from/ off* は分離の意味として捉えられ、句全体は「道路から取り除かれた雪」と解釈される。一方、(28b)の *of* は容認されない。*out of* の逸脱性は、ランドマークが〈容器〉として捉えられないことに起因している。実際、ランドマークを〈容器〉とみなすことができる個体で置き換えると容認される。

(29) a. milk {from/ out of} the refrigerator

b. *milk of the refrigerator

(29a)は「冷蔵庫から取り出した牛乳」と解釈され、from/ out of は容器からの分離もしくは移動を表す。¹¹これと対照的に、(29b)の of は容認されない。

(28)と(29)の文法対立からわかるのは、A of B 形式の環境では、of 句が動的な分離を表さないということである。むしろ、of は A と B の要素の何らかの関係（部分・全体の関係や帰属関係など）を表しているといえる。A と B の要素が離れている場合（e.g. a man of Osaka）でも、離れていない場合（e.g. a side of the road）でも 2 つの要素の関係が保持されていることが重要である。一方、out of/ off は動的な分離を表し、そのランドマークが平面とみなされる場合には off/ from が、容器とみなされる場合には out of/ from が用いられる。

これまで A out of B 形式の本質的意味が数の対比であると想定し、その由来を out of の意味特性に求めて考察してきた。最後に、部分構造と A out of B 形式の本質的な意味をまとめてみたい。部分構造は 3 種類の部分・全体の関係を表しうるが、本研究ではとくに M 部分関係と T 部分関係を取り上げた。M 部分関係では、第 2 名詞（句）が〈全体〉を表し、第 1 名詞（句）が〈部分〉を表すため、母集合は有界的でなければならない。一方、T 部分関係では、第 2 名詞（句）が表す母集合は非有界的になる。これは、タイプ名詞が空間的・時間的に既定されないためである。数量が漠然としている〈全体〉に対して〈部分〉がトークンとして表される。of の意味機能は、主体とランドマークのつながり（ここでは、部分・全体の関係）を表すことであるため、第 2 名詞（句）の有界性は問われない。

out of の意味機能は、主体のランドマークからの動的な分離を表すことである。すなわち、主体の〈部分〉がランドマークの〈全体〉から取り出される。よって、A out of B 形式では、第 1 名詞（句）と第 2 名詞（句）のいずれも明確に規定される必要がある。このために、第 1 名詞（句）として絶対的数量を表さない比率的数量詞が許されなかったり、第 2 名詞句として非有界的な集合（タイプ名詞など）が許されなかったりする。第 1 名詞（句）と第 2 名詞（句）が有界的でありさえすれば、第 2 名詞（句）が〈全体〉であるかどうかは問われない。〈全体〉を表す場合には M 部分関係の解釈が得られ、〈全体〉を表さない場合には比率の解釈が得られる。

5. おわりに

本研究は、A of B 形式（部分構造）と A out of B 形式によって表される部分・全体の関係について考察した。グループ・メンバーの関係（M 部分関係）については、ど

ちらの形式でも表せるのに、タイプ・トークンの関係（T 部分関係）については、部分構造でしか表すことができないという事実に注目し、その説明を試みた。

まず、Tanaka (2012)と田中(2015)の考察に基づいて、M 部分関係を表す部分構造（M 部分構造）が there 存在文の意味上の主語として容認されないのに対して、T 部分関係を部分構造（T 部分構造）は there 存在文の意味上の主語として容認されることをみた。

つぎに、A out of B 形式が T 部分関係を表さない理由について考察した。当該形式は、第 2 名詞（句）（=B の要素）が〈全体〉とみなされる場合に M 部分関係を表すことができるが、第 2 名詞（句）が〈全体〉とみなされない場合には、第 1 名詞（句）（=A の要素）と第 2 名詞（句）の数の比を表すことになる。ところが、T 部分関係にかかわるタイプ名詞は、メンバーの数を問題にできない。というのも、タイプとは空間的・時間的に既定されない概念だからである。よって、A out of B 形式の本質的な意味である、第 1 名詞（句）と第 2 名詞（句）が表す数の対比は、T 部分関係では達成できない。

さらに、A out of B 形式の本質的な意味、すなわち数の対比、の由来を探るために、of と out of の意味特性を比較した。まず、Lindstromberg (1998)に基づいて、ランドマークが特定化されているときは、out of の of が省略できないことをみた。また、from との類似性から out of と off がいずれも「分離」の概念を含み、ランドマークからの主体の動的な分離を表すことを確認した。これに対して、of は主体とランドマークのつながりを表すだけで、out of のような動的なイメージが含まれないことをみた。本研究は、この of と out of の意味特性の違いから、部分構造と A out of B 形式が T 部分関係を表しうるかどうかの違いが生じていると主張した。すなわち、ランドマークからの分離を表すためには、その出所が明確に規定される必要があるため、メンバーの数が定まらないタイプ名詞のような集合は除外されることになる。一方、of のように 2 つの要素の関係を表す場合は、そのような数量の不明確さは問題にならない。

今後の課題としては、2 つの要素のつながりを表す部分構造と 1 つの要素がもう 1 つの要素から分離することを表す A out of B 形式が、どちらも M 部分関係を表しうることの機能的な意味合いを探ることがあげられる。

注

* 本稿は、Tanaka (2012)および田中(2015)の第2章 2.5節の内容を発展させたものである。本稿の一部は内輪の研究会で発表する機会があった。参加者から有益なコメントをいただいたことを記して感謝申しあげたい。とくに、岩田彩志先生(関西大学)、鍋島弘治先生(関西大学)、西山敦子先生(和歌山大学)、五十嵐海里先生(龍谷大学)には示唆的なコメントをいただき、議論の修正や分析の手がかりをみいだすのに大いに役立った。また、英文要旨の校正やインフォーマント調査にご協力いただいた、同僚の Michael Herke 氏、Todd Hooper 氏、Amanda Taura 氏にお礼申しあげる。本稿の草稿に対してコメントをいただいた2名の覆面査読者にも感謝申しあげたい。それによって、議論の不備や説明不足の箇所、誤植などを修正することができた。もちろん、残った不備は、すべて筆者の責任によるものである。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「部分・全体関係を表す表現の日英対照研究」(課題番号:15K02618)による研究の成果の一部を含んでいる。

¹ 句をカッコ表記にしているのは、つぎのような例も念頭に置いているからである。

- (i) a group of the students
- (ii) one out of them

(i)では of の前に名詞句が生じており、(ii)では out of の後ろに名詞が生じている。

² A out of B 形式と並行的に、部分構造でも of 句の前置が可能である。

- (i) Only a few of the ten reviewers praised his play.
- (ii) Of the ten reviewers, only a few praised his play.

(Quirk et al. (1985: 1287))

(i)は通常の部分構造であるが、(ii)は of 句が前置されている。

Quirk et al. (1985: 1287)が指摘しているように、of 句が文頭に生じる文では of の目的語がつぎの例のように不定名詞句であっても容認される。

- (iii) Of ten reviewers, only a few praised his play. (ibid.)

部分構造制約の違反になりそうなこの構文について、Quirk et al.は、of 句を as for/ as to とみなすか、つぎのような there 存在文と読み換える可能性を示している。

- (iv) There were ten reviewers, but only a few praised his play. (ibid.: 1288)

よって、本研究も(iii)のような構文を通常の部分構造と区別し、考察の射程には入れないこと

にする。

3 Milsark (1974)によれば、some と many は通常、基数的な解釈になるが、強勢を受けると比率的に解釈され、母集合の存在が前提となる。英語と日本語の基数的数量詞と比率的数量詞の解釈の違いについては、加賀(1997)を参照のこと。

4 ただし、部分構造の第2名詞(句)に指示詞が含まれる場合、人を表す名詞では容認性が低下することを田中(2015)が指摘している。

(i) A: How many returnees do you have in your class?

B₁: I have some of them.

B₂: #I have some of those (returnees).

(田中 (2015: 45, 47))

Aの質問は帰国生徒の母集合を前提にしていない。よって、B₁の応答の部分構造はT部分関係を表し、容認されるが、B₂の部分構造はM部分関係の解釈を受け、容認されない。物を表す名詞と人を表す名詞で指示詞をともなった場合の解釈が異なるという事実は、指示詞+人を表す名詞では指示性が残ってしまい、タイプ解釈を受けづらいことに関係していると考えられる。本研究は人・物の対立には立ち入らないが、議論の詳細については田中(2015)を参照のこと。

5 two out of the studentsのような例は、文脈のなかで第2名詞句の数が指定されているとみならず。筆者のインフォーマントによれば、第2名詞句の数量が示されない文脈では、むしろ部分構造のtwo of the studentsを用いるべきであるという。

6 ランドマークが人を表す名詞の場合は、offよりもfromが好まれるとLindstrombergは指摘している。

(i) It's like taking candy from a baby. [standard formal and colloquial]

(ii) It's like taking candy off a baby. [very colloquial, even rough]

(Lindstromberg (2008: 45))

Lindstrombergによれば、offは表面(surface)からの分離を表す(fromは表面だけでなく内面も含む)ため、(ii)のように人に用いると、人を面のある物体として捉えている(to think of living beings merely as objects with surface)ように聞こえるという。

7 Lindstrombergはfromとout ofの違いをsnapとfractionの違いになぞらえて説明している。snapは直接的で動的なイメージを喚起するが、fractionはそういうイメージを喚起しないという。よって、学術的な文章で用いるとsnapは雑でくださった(too rough and folksy)印象を与えやすい。

8 査読者の指摘による。ほかにbereaveやclearなども同じ構文に生じる。

9 査読者の指摘による。

10 Lindstrombergは、「除去・はく奪」の例に加えて、古いofの用法を反映した表現として

つぎのような例をあげている。

- | | | |
|-------|---|-----------------------------|
| (i) | We live to the east of Canterbury. | (Lindstromberg (1998: 203)) |
| (ii) | The results of/ *from the test were good. | (ibid.) |
| (iii) | man born of/ ?from woman | (ibid.: 204) |
| (iv) | take leave of/ ?from someone. | (ibid.) |
| (v) | She was rid of/ *from him at last. | (ibid.: 205) |

(iii)・(v)では of が形容詞や動詞などの述語成分として生じており、述語の語彙特性から分離が想起されていると考えられる。(i)と(ii)の A of B 形式には述語成分が含まれていないが、カンタベリーの東部(the east)は方角を表しておりカンタベリーから切り離されたものでないし、テストの結果(the result)もテストと切り離されないように厳密に管理される。以上をふまえると、of 自体が分離を表していると捉えることには問題があるように思われる。この点については、本文のあとの部分で詳しく論じる。

¹¹ なお、milk off the refrigerator も容認されるが、(29a)の場合のような〈容器〉からの移動としてではなく、〈平面〉からの移動として捉えられる。つまり、「冷蔵庫の上(外側)から落ちた牛乳」という意味になる。注6の off と from の違いも参照のこと。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1971) *The Phrasal Verbs in English*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 加賀信広 (1997) 「数量詞と部分否定」『指示と照応と否定』廣瀬幸生・加賀信広, 91-178, 東京: 大修館書店.
- Lindstromberg, Seth (1998) *English Prepositions Explained*. Amsterdam: John Benjamins.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*. Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Selkirk, Elisabeth O. (1977) "Some Remarks on Noun Phrase Structure." *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian, 285-316, New York: Academic Press.
- 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』東京: 小学館.
- Tanaka, Hideki (2012) "A Contrastive Study of *A of B* and *A out of B*." *JELS* 29, 163-169, the English Linguistic Society of Japan.
- 田中秀毅 (2015) 『英語と日本語における数量表現と関係節の解釈に関する記述的・理論的研究』東京: 開拓社.

コーパス

British National Corpus [BNC]

WordbanksOnline [WB]

Summary

This study investigates the syntactic and semantic properties of an *A of B* construction (partitives) and an *A out of B* construction. Tanaka (2012, 2015) observes that while both constructions may express a group-member relationship (e.g. *two {of/ out of} the five books*), there are some crucial differences. One prominent difference is that partitives can express a type-token relationship, whereas *A out of B* cannot (e.g. *two copies of the book* as opposed to **two copies out of the book*). This study attempts to explain the origin of this difference. It will be argued that the essential meaning of *A out of B* is to compare numbers in both A and B positions. In *two out of ten students*, for example, two and ten (students) are compared. The elements in A and B should denote a bounded set. This means that type-referring noun phrases, which denote unbounded sets, may not occur in either A or B. In addition, semantic differences between *of* and *out of* are examined, according to Lindstromberg's (2008) analysis, where he claims that *out of*, but not *of*, has a “dynamic image” of Subject's movement or separation from Landmark. We will argue that this is why the object of *out of* should be specified in number.